

## 都と南都をむすぶ道

1097（永長2）年3月28日は晴天でした。この日の午後2時ごろ、堀河天皇の一行が「波々曾之毛利」の南に設けられた休憩所に到着しました。すでにこの年2月初めごろから、天皇の春日社への参詣の予定が立てられており、その準備が重ねられていたのです。

### ■春日参詣

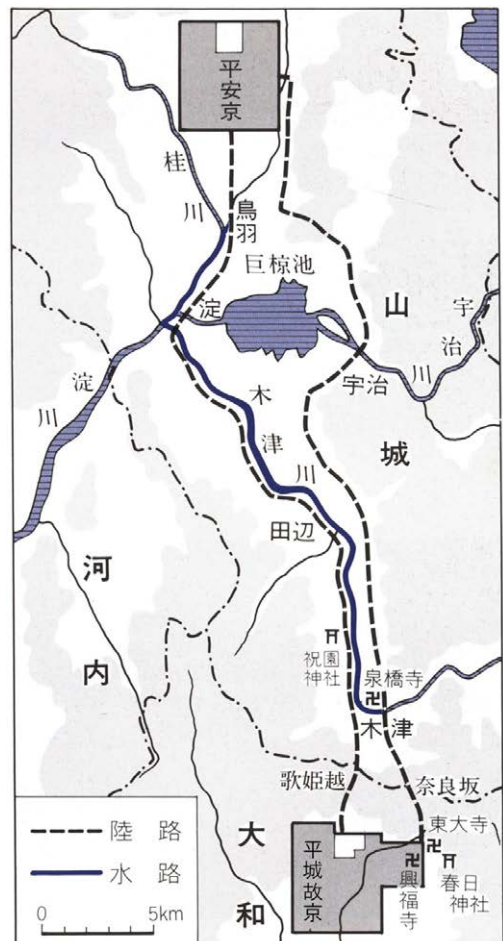
春日社は藤原氏の氏神の社です。奈良時代の末期に、藤原氏の氏寺である興福寺の東の「神地」とされていた所に祀られました。その後、平安時代になって藤原氏の隆盛にともなって春日社の祭である春日祭は国家的な祭祀となりました。

春日祭は毎年2月と11月の最初の卯の日に行われることになっていましたが、10世紀初めに藤原氏の氏長者（氏の首長）であった藤原忠平が参詣してからは、藤原



春日大社（奈良市） 桑原英文撮影

氏の恒例の行事となりました。いわゆる春日詣です。もちろん藤原氏は摂関家として権力を持っていましたので、春日祭は藤原氏のみならず、国家的に使者が派遣される四時祭（臨時に使者を派遣する祭に対して、常に使者を派遣する祭をこうよんでいました）であり、春日詣も藤原氏に限ったことでなく、天皇の場合も少なくはなかったのです。



春日詣のコース 『木津町史』 本文篇

このような春日詣のコースは2通りありました(19ページの図参照)。1つは、平安京から東南に下って宇治を経て、南行して(泉)木津で木津川を渡って、奈良山を越えるコースです。もう1つは、平安京から西南に下り、木津川の西側を南に上って歌姫を越えるコースです。ときには木津川の水運を利用した場合もあったようです。いうまでもないことですが、後者のコースはこの精華町を通過するコースで

す。一般的には宇治を経由するコースから、木津川の西側を通るコースへと変わっていきます。したがって平安時代の後半に入ると、精華町は奈良(南都)や吉野へ行く平安貴族たちが往来することが多くなったのです。祝園(波々曾之毛利)は紅葉の名所で、紅葉の歌枕として、たくさんの和歌によみこまれました。

## ■堀河天皇の春日詣

白河天皇の子であった堀河天皇が春日社に参詣する計画は、この年2月10日から直接の準備が始まり、藤原宗忠は奈良に向かいました。この日夕刻には祝園の南の木津川の川辺にある恒例の休憩所を点検し、翌日には雨の中を奈良からの帰路にも立ち寄っています。これらの行幸(天皇の外出)の準備の費用は各国が分担し、この地域の担当は摂津国でした。このように



木津川



貴人の華やかな行列 関白の賀茂詣のようす。行列の先頭に隨身(護衛官)、騎乗の公卿たちに続き、中央に関白の牛車。車のうしろは檢非違使(警察官)、雑色(雑役夫)、楽人たちが従い、同行の公卿の車の一行が続いています。

準備は進められたのですが、天皇に穢けがれがあるというので延期され、3月28日となったのです。

盛大な準備と、華やかな多くの行列を前に、この地域に生きた人たちはどのような感慨かんがいを持ったのでしょうか。それを具体的に示してくれる史料は残念ながら何もありません。わずかに絵巻物おうちから往時の姿をしのぶほかありません。



祝園神社

『梁塵秘抄』  
りようじんひしょう

ふゆくとも ははそのもみちなちりそよ、

ちりそよなちりそ

いろかへてみむ

『千戴和歌集』  
せんざいわかしゅう

吹きみだる ははそが原をみわたせば

色なき風も紅葉しにけり

賀茂 成保

『新古今和歌集』  
しんここんわかしゅう

時わかぬ 浪さへ色に いづみ河

はゝその杜に 嵐吹らし

藤原 定家

『金槐和歌集』  
きんかいわかしゅう

泉川 はゝその杜に なく蟬の

こ糸のすめるは 夏のふかさか

源 実朝

『新勅撰和歌集』  
しんちよせんわかしゅう

さほやまの はゝそのもみちいたづらに

うつろふあきはものぞかなしき

藤原 基綱

紅葉の歌枕となった、ははそ（のもり）をよみこんだ和歌



これは賀茂詣のようなのですが、木津川沿いの南都詣もこんな風だったと思われます 「年中行事絵巻」田中家蔵 中央公論新社提供